

安保フンサイへ人間の渦巻を!!

過期フンサイ

No. 15

六月が来た。すべてが動きだした

六月が来た。晴れた日に木の間を吹く風は爽やかな初夏の風であるはずなのに、それはどうしてこうも血生臭い匂いを南から運んでくるのか。六月が来た。雨の日に木の葉にとまっている青蛙は、梅雨があけたあとの真青な夏空と白い雲とを予想させるはずなのに、どうしてこうも不吉な黒い色だけを予感させるのか。

それは、この六月の日本をおおう、いやアジアをおおう政治が、人間を殺し、人間を腐らせているからだ。

だから、人びとは動きだしたのだ。その動きは、十年前の六月とは違っている。根本的に何かが違っている。その黒い政治の根本を、その仕組みを、そしてそれを支える筋道を入びとは十年前の六月とは比べものにならないほどよく知っているからだ。

世の中変わった——紅茶にナントカ。政治も変わった。首相も変わった。兄貴から弟に。だけど、変わる世の中に、変らぬものただ一つあり。殺人を許さず、腐敗を憎み、人間として生きようとする市民の心意気。

十年前に、「声なき声はワタシを支持している」とうそぶいた岸信介にこたえて、国会をとりまくデモの渦の中から生まれた「声なき声の会」の人びとは、古い名簿をもって一人ひとりをたずね歩いた。そして名簿にのこされた人びとは社会のさまざまな場所、人間として腐敗とたたかって生きていることを確かめた。——「声なき声の会」のある女性は、そういう話をしていた。

新聞に「平連の「毎日デモ」の記事をみつけたある牧師さんは、清水谷公園に出かけてみた。公園で「平連ニュース」を買った。「逮捕された時の心構え」という記事が出ているのを読んでビククリした。エライトコへ来テシマッタモンダ。一瞬そう思った。歩き出して、「シユプレヒコール！」といわれても、口がパクパクあかなかつたし、声も出なかつた。いつ逮捕されることになるのか、気が気でなかつた。「もうじき解散地です。沿道の皆さん、一緒に歩きましょう！」。そういうデモのスピーカーに勇気をえて、はじめて「アンポ・フンサイ」と怒

鳴って来た。デモをしてくるんだ——そういう気持ちをはじめてしてきた。——その牧師さんは、経験をそう友人の牧師に書き送った。

毎日デモ。乳母車をおして加わっている若い母親。脇をヘルメットをかぶって勢いよく駆けぬける学生のグループ。母親は乳母車を歩道にあげた。しかし、デモの列といつしよに解散地まで並んで歩道上を乳母車を押しつづけた。あの母親。乳母車をもつてバスには乗れない。解散地まで歩いてきて、そして出発地までまた乳母車を押して歩いて帰るのだろうか。気にかかる。今度聞いてみようか。そして、歩道ではなく、最後まで車道を、デモの列の中を、乳母車を押して歩けるような、そんな部分を、デモの中に、つくりたいな——ある学生はそういう話をしていた。

六月が来た。変わる世間の中で、しかし、その政治の根本が変らぬかぎり、吹く風は相変わらず血生臭く、すえた匂いを運ぶ。そして、それを支えるまでは、変らぬ人びとの、人間として生きようとする不屈の努力。

政治の季節六月の中で、すべては新たなつながり、新たな見通しをもって、動きだした。七〇年の六月だもの。

だから、この六月が過ぎても、その動きは決して止まることはないだろう。もはや人びとは、何ものにも幻想を抱いてはいないのだ。この新たなつながりと、新たな見通しをもって、自分たちの力で、自分たち自身の力で、この動きをつづけてゆく以外に、世の中の根本が変わることはないのだ、ということをはつきりと知っているからだ。

だから、この六月が過ぎても、私たちは「挫折」を知らないだろう。六〇年とは違う、七〇年の六月なのだもの。

この動きが続き、続き、続いて、そして、八〇年の六月に吹く風は、血生臭い、すえた匂いではない、本当に爽やかな初夏の風となるであろうことを、夏空は底ぬけに青く、浮ぶ雲は、真に白く、白く輝くであろうことを、人びとは確信しそして七〇年の六月の今、動く。歩く。駆ける。

七〇年アンポ・フンサイ!

あなたならどうする 〈無数の問題とあなた〉

安保条約・ベトナム・インドシナ戦争・沖縄・三里塚・朝鮮・教育・未解放部落・公害・マスコミ・米タン・万博・物価・自衛隊……スベテハツナガッテイル

かえりたい帰れない 〈戦争のエスカレート〉
アメリカによるベトナム侵略開始↓南ベトナムのクーデター多発↓トンキン湾事件↓ベトナム参戦国会議↓ラオス侵攻↓カンボジア侵略……アメリカハ敗ケルタビニ戦線拡大スル

さい会 〈10年前の多くの集団〉
安保改定阻止国民会議・全学連・共産党・共産主義者同盟・安保批判の会・安保問題研・若い日本の会・現代歌人協会・世界平和七人委・ペンクラブ・新劇人・音楽五団体・大本教・総評・社会党・声なき声……イマ人々ハドコニイル
だい一章・涙 〈過ぎた10年間の死者たち〉
樺美智子・山崎博昭・由比忠之進・榎本重之・糟谷孝幸・中村克己……肥大シタ権力ハ次ニアナタヲ狙ウ

なげきのボイン 〈機動隊・右翼の暴力行為〉
国会デモへの殴り込み・浅沼氏刺殺・警棒からガス銃へ・ガス銃から実弾へ・シージャック射殺……自衛隊ノ治安出動ハスグソコニ来テイル

はりすの旋風 〈安保フンサイへ人間の渦巻〉
平連第一回デモ・日米市民会議・反戦広告・反戦脱走兵・万博・週刊アンポ……6月行動ハ新シイ始マリヲ告ゲル

ま夜中のギター 〈広場とは何か〉
ひとつの広場が創られ、消えた・広場から通路へ・再び広場を解放せよ・都市への権利……毎週土曜日夕方ハ新宿西口広場へ集マレ!

やす国の母 〈教科書と神々のラッシュアワー〉
靖国法案・紀元節復活・「判決・佐紀子の庭」放映中止・教科書実質的に国定へ・修身教科書・神話復活……社ノ奥カラ出テ来タモノハ?

らウ・ラウ・ラウ 〈10年の風俗〉
ダッコチャン・ブルーハワイ・六本木族・アイビー・007・モッズルック・グループ・サウンドズ・3C・フーテン……のーぶらハ70年ノ流行

わか者は旅を続ける 〈70年代の私たち〉
革命は一せいたく品でもなければ一技術でもない。それは他のあらゆる手段が不可能な場合の歴史的必要事である。

おわりにひとこと 鶴見俊輔

言葉は、ながもちしない。日常の道具として使われる言葉は、かえって地味ななりに五年や十年たつても色あせないが、一度ジャーナリズムのエスカラーターにのつて屋上までのぼりつめた言葉は、あつというまに下降しはじめ、いやな意味をつめこまれて下水道にたたきこまれる。

「アプレゲール」という言葉が、ひとつの良い例だ。世界大戦をくぐつてはじめてあらわれた日本文化の新しい質を言いあらわそうとしたこの言葉は、一年とたたぬうちに「アプレ」とちじめられて、行儀の悪さをいうようになり、その場の気分であつて人を殺すような衝動的な犯罪をさすようになって、やがて忘れられた。

「民主主義」、「平和」、「文化」。それらの言葉も、それをとえはじめた国家が政策をかえてはじめて反対の内容を同じ言葉であらわそうとし、やがて気はずかしくなつてあまり使われないようになってしまった。

「ベ平連」という言葉は、どうか。誕生以来五年たつて、「アプレ」なみに言えば、もうよごれはて下水道をながれているところだ。たしかによごれはした。しかし、われわれがこの言葉を国家にも官僚組織にもマスコミにもゆずりわたさなかつたゆえに、この言葉は、誕生当時よりも使えばえのするものになつてゐる。運動が生きているという実感が、五年目のこの言葉にはある。

ベ平連とは、何か。かつての両国の川開きのように高く火花を打ちあげて見物人をおもむく能力。センセーションをおこす能力。そういう力としてのベ平連も、たしかにある。しかし、それには終りが来ているのではなからうか。それは終りてなくて休みであるのかも知れないけれども、われわれの手で出してきたこの週刊誌の終りは、ひとつの時期の終りをつけてゐる。

火花をあげる能力に近いところにあるがすこしちがうところに、胸をはって歩く能力がある。ベ平連の運動のこの側面が大切だと、私は思う。なぜなら、火花をあげる能力のほうは、日本政府がヴェトナム戦争への協力をはつきりときめかねてゐる間、そしてマスコミが反戦運動に光をあててゐる間だけしか

保つことができないうが、胸を張って歩く能力のほうは、そういう状況がくずれても、なおも相当程度に保つてゆける自主的なものだからだ。

ベ平連が戦後日本の風俗史に新しい一ページをつけたか。戦争放棄を憲法で定めてゐるこの国で、戦争に反対する人間が、自身のせまい思いをして道を歩く必要はない。広場になつて戦争反対と言いつづけること。週刊誌がなくなつても、これをこれからもやつてゆきたい。

ベ平連がしたもうひとつのことは、目の前の状況から力をひきだしてくることだ。イントレピッドの四人は突然にわれわれの前にあらわれ、それから成算もなしにフーテンのようにわれわれはかれらの問題ととりくんできた。偶然ととりくむことからはじまつたこの反戦兵士を助ける運動を、方法として今考える必要がある。日本の米軍基地内だけでなく日本の自衛隊の中にもいる反戦兵士の問題を不服従の国際的連帯の中で新しく考えるところに来ている。

方法上の弱さがあつたとしても、状況のつきだした問題ととりくむベ平連の流儀にはそれなりの強さがある。ヴェトナム戦争に反対することからはじまつてゐるため、この実際の問題をとくためには、誰れとも力をあわせてやつて来た。党派のちがいが人間的にくしみをうみ、論敵をスパイよばわりするよくな足のひつぱりあひから、これまでのところベ平連は自由だ。私は、ベ平連の仲間であることがうれしい。

もうひとつ、おそらくこれは最大のことだろうがベ平連は運動をつづけてゐる間に、ベトナムの人民を助ける運動であるよりも、ベトナムの人民に助けられはげまされてアメリカの軍国主義にたちむかう運動になつて来たのではないか。この間に、先進国後進国の区別は、逆転してしまつたのではないか。

小説『眼』 小田実

サトリについて友人と話した。友人というのは仏教のことに明かす男だが彼によると、サトリをひらくと、人間の眼が澄んできれいになるそうである。その代わり、彼について何も書くことがなくなる。申しおくれたが、友人は小説家志望の男である。邪念がなくなるんやな。心が動かされんようになる。

そんな眼で見たら世界はどないに見えるんやろ。私がぼんやりつぶやくと、友人は断言するように言う。

物に見えるんやろな。物そのものに見える。人間かて、物に見える。あんたを見たかて、あんたは人間やない、物や。

そんな眼なら、私はこれまでに見たような気がする。たとえば、インドで、金持ちが街路にいざきたなく寝りこける「街路族」を見る時、彼はそんな眼で、つまりは、「物」として彼らを見ていた。インドは貧しい国で、物の中でもっとも貧しい人たちは住む家などもなく街路に寝るよりほかはないのだが、私もカルカッタで彼らの仲間入りをしたことがある。

ということ、そのせいか、私には人が人間としてではなく物として見る眼がどんな眼か解る。死体を見る時、私たちはどんな眼で見ているのか。いや、そもそも、死体というものは何なのか。あれは物か。

太平洋戦争末期、奇妙な死体を焼跡で見つけたことがあつた。洋服屋の人台を見ると（それも黒いやつだ）、いつでも思い出すのだが、まさにその人台そっくりの死体だつた。頭もなければ、手足、胴体もない、あるのは胸部だけで、それもまっくらに焦げていた。

私は中学生で、焼跡かたづけの作業にかり出されてたのだが、それが死体だと解つた時、その場にいた数人が、いつせいにしだまつてしまつた。いや、考えてみると、口から出なかつたのは、声ではなくて、言葉だつたのだ。「死体」という言葉は、頭も手足も胴体もある死体につかう言葉で、そうした人台めいただけの死体は、本当を言うと、それはもうはつきりと「物」だつたのではないか。無性に

こわい気がした。

明日にでも空襲の火災にまきこまれて、自分もまたその「物」に化してしまうかもしれない。ひとたび、眼前の死体を「物」とゆうふうには呼べば、私自身もまた、そうした運命におちいるような気がして私は必死にべつ言葉を探してゐた。ただ、そのものは、真夏の燃えくるめく陽光の中で、激しくおつた。蛙罐の蛙のおいでである。今だに、私は、一種の抵抗感をもつてしか、蛙罐の蛙をたべることはできない。

その人間を人間としてではなしに物として見る眼は、今の世の中にはいくらもあるような気がする。ソソミの農民を虐殺したアメリカ兵の眼。樺美智子を殺した人間の眼。あるいは、乗つとり犯人を射殺した警官の眼。

殺人者はみんな、サトリをひらいてゐるのか。ひらいてゐるとすると、どんなサトリか。そんなふうにして殺される人間の眼は、自分を殺す人間をどう見ているのか。いつか、死んだ人の今はのきわの眼のレンズにうつつた映像が写真になつた雑誌が出ていた。それはかなりぼやけた写真であつたが、殺人者の姿がうつつていて、そのサトリを開いた眼も写つていて、いつのまにか私のそばに来て写真のぞきこんでいた見知らぬ男が、ひどいんだね、ひどいんだね、と言う。私はうなずく。なるほどひどいんだね。

あれはサトリはんでんか。なるほど殺人者のうしろに、二重うつしのようにならう一人うつつていて、もちろん、それはサトリにならう。私がまたうなずくと、彼はなにげない口調でつづける。

あんたもいはりまつせ。彼の指が動いて、サトリウなな某の背後を指しめす。そのあたりハッキリ見えないのだが、彼は確信ありげにくりかえす。

あんたもいはりまつせ。きれいにうつつていませ。彼の指のさしめすあたり、何も見えないのだが、私は奇妙に苦しむ。



安保をふせ

平和をまもろ